

銀座七丁目の会員制ク  
ラブVIPルームで兄  
の借金の形に呼ばれた  
夜に組系若頭のオーダ  
ースーツを汚しながら  
朝まで貪られるカント  
ボーイホスト

「あ、あっ、ま、待っ……黒木、さんっ、スーツ、汚れ……っ♡」

「いいから黙って啞えてろ」

ぐちゅん♡♡と下から突き上げられ、目の前が白く弾けた。革張りのチェスターフィールドソファに男があぐらで沈み込み、その膝の上で僕は膝立ちにさせられている。脚は震えて言うことを聞かない。両手は、誰に縛られたわけでもないのに、黒木さんのジャケットの襟をぎゅうっと掴んでしがみついていた。

「ふ、ぐっ♡ あっ、お、奥、奥にい……っ♡♡」

「ホストの分際でいい声出すじゃねえか」

「ちが、ちが……っ♡ こんな声、店じゃ……っ♡♡」

「だろうな。だから今夜だけ俺の前で出せ」

ずちゅ、ずちゅ、と粘ついた水音。組系の若頭、黒木一臣のオーダースーツ——ボスポーリの濃紺スリーピース——の太腿の上に、僕の奥から零れた透明な雫がじわりと染みを広げる。数百万のスーツだと聞いた。その折り目に、僕の愛液が落ちている。

(うそ……っ♡♡ ぼ、ぼくのおまんこから、汁う……っ、こんなに……っ♡♡)

心の中で泣いた。声に出したら、もっと壊れる。

黒木さんはベルトを緩めただけだ。ジャケットを羽織ったまま、ベストのボタンも全部留め、シャツのカフスはきっちり光らせている。きちんと着た男に、僕だけが半裸で貫かれていた。シャツのボタンは、最初の一突きで全部弾け飛んだ。剥き出しの胸、薄い乳首が空調の風にツン♡と尖り、それを黒木さんは見下ろし、ゆっくり腰を下から押し上げる。

「おっ♡ おっ♡ ま、また、奥っ、ぶつかっ……っ♡♡」

「ここか。カントの一番奥、ここだろ」

「やあっ♡ そ、そこ、ぐりぐり、しないでえ……っ♡♡」

ぐにゅう♡と先端で子宮の入り口を押し回された。僕の身体は男なのに、腹の中にはちゃんと子宮がある。カントボーイ——二十四年隠してきた身体の構造。そこを今、葉巻の匂いがする組系の男に、根元まで埋められて、ぐにぐにと弄ばれている。

「ひっ、ひぐっ♡♡ せ、せまっ、せまいい……っ♡」

「狭いんじゃない。俺のがでかいんだ」

「やあっ♡ そんな、こと、いわ……っ♡♡」

「事実だろ」

黒木さんの声は低い。怒鳴らない。組内では「氷の若頭」と呼ばれている、と別のお客様が囁いていた。その通りだ。冷たい。なのに、僕の中に埋まったそれだけが、火傷しそうに熱い。

シャンデリアの灯りは絞られていた。ロココ調の白い漆喰天井、金箔の蔓装飾、地下三階の窓のないVIPルーム。葉巻の煙が空気を青く染め、空のドンペリ・P3が氷の溶けたバケツに浮かび、カチン、と微かな音を立てる。

空気が、甘い。葉巻の甘さ。お酒の甘さ。そして——僕の身体から漏れ続ける、もっと露骨な甘さ。

「黒木、さん……っ♡ぼ、ぼく、もう……っ♡」

「もう、何だ」

「いっ、ちゃ、いっちゃ……っ♡♡」

「一回戦でイクなって言っただろうが」

ぐちゅん♡♡とわざと深く突き直された。子宮口に、硬い先端がじゅぷん♡♡と嵌まり込む。

「ふきゅうっっ♡♡♡」

(おっ♡お、奥、こじあけ……っ、らめ、らめえ……っ♡♡)

声にならない。出せない。出したら、本当に終わる。なのに、黒木さんは親指を僕の唇に押し込み、

「ほら、口開けろ。ちゃんと声出せよ」

「ふぐっ♡んうっ♡♡んあ……っ♡♡」

「お前のその声、半年間、ずっと聞きたかった」

——半年。

その単語で、僕の頭の中で何かが、ぱきん、と音を立てた。

「は……はん、とし……？♡」

「七回指名した。一回も触らなかつたろ。あれ、全部、今夜のためだ」

ぐっ、と腰を抱え直された。位置がずれて、奥のもっと奥、いままで触れられたことのない場所に、先端がごっつん♡♡とぶつかる。

「ひっ、ぎっ♡♡♡ そ、そこ、しらな、しらな……っ♡♡」

「俺だって今夜初めて触る場所だ。光栄に思え」

「おおっ♡♡♡ いっ、く、いっちゃ……っ♡♡」

もう駄目だった。

ジャケットの襟を掴んだ指先に、ぎゅう♡と力が籠もる。爪が、シルクの裏地に食い込む。黒木さんは止めない。止める気がない。下から、ずちゅっ♡ずちゅっ♡ずちゅっ♡と、振り子の規則正しさで突き上げる。

（や、やだ……っ♡お客さんなのに……っ♡ホストなのに、ぼく、お客さんの上で、こんな、こん、なあっ♡♡）

心の声まで蕩ける。

葉巻の煙が、ふっと僕の鼻先に吐きかけられた――

あ。

駄目。それは。

「ひっ♡♡♡ んっ、んあああっ♡♡♡」

葉巻の甘い香が鼻の奥を撫で、頭の芯がじん、と痺れた。僕の弱点。三歳まで父の書斎で嗅いでいた、たったひとつの

安心の匂い。それが今、男の腰に貫かれた状態で鼻に届いて

---

絶頂が、来た。

「~~~~~ッ♡♡♡」

声は出なかった。中だけが、ぎゅう♡♡と勝手に黒木さんを締めつける。膣の奥が痙攣して、それに合わせて、黒木さんの口の端が、わずかに上がった。

「……まだ朝まで時間あるぞ、怜」

「お……♡ お……♡ せん、せ……黒木、さん……っ♡♡」

「いい子だ。今のは前菜だ」

前菜。

前菜って、いま、ぼく、何度目の絶頂——

意識が、ぷつりと途切れた。

六時間前のことを、僕はまだ忘れていない。

午後六時、銀座七丁目の地下。「Salon Noir」のエレベーターは、オーナー権限で停止されていた。地下三階で扉が開いた瞬間、空気の質が変わったと分かる。普通のクラブの匂いじゃない。葉巻と、もっと、何か——血の匂いに似た緊張。

「朝霧怜、です」

「待ってた。座れ」

声だけで、ああ、半年前から店で七回指名してくれた黒木さんだ、と分かった。革張りソファに座っていた。ボスポー

リの濃紺、ポケットチーフはシルクで濃紺、葉巻はコイーバ。  
指の関節が太い手。左手の薬指に、銀の指輪。

兄が消えたのは三日前。

残ったのは、二千万の借金台帳と、「妹みたいに可愛い弟がいるんで」という置き手紙。——妹みたいに。その四文字で、僕の手が震えた。蒼にいさんは知っていた。僕の身体のことを。知っていて、それをカードにして消えた。

「兄貴の借金、二千万。お前が肩代わりするか」

「……身体で、ってことですか」

「俺はカタギに手は出さねえ主義だ」

黒木さんは葉巻に火を点けた。煙が、ふわ、と立ち上る。  
胸の中で安堵と落胆が同時に衝突する。

ホストとして指名されているのに、一度も身体に触られなかった半年間。それが嬉しいような、惨めなような。「商品ですらないんだな、ぼく」と思って眠れなかった夜のことを、黒木さんは知らない。

「身体じゃなくてもいい。組のフロント企業で帳簿係をやれ。  
三年で返せる」

「……」

選びかけた。

ふと、兄の置き手紙が頭をよぎる。

（蒼にいさんは、ぼくの身体のこと、誰かに話したら困るから黒木さんに呼ばせたんだ。ぼくが「身体で払う」って言うのを、見越して——）

兄を恨んだ。同時に、納得した。これが朝霧家の人間だ。ぼくはずっと、兄の博打の尻拭いに人生を使ってきた。今夜も、同じ。

「身体で、払います」

声が震えた。

黒木さんは葉巻を灰皿に置いた。ゆっくり立ち上がり、僕の前に来て、シャツのボタンに指をかける。

「ほんとうにいいのか」

「……はい」

「途中で泣いても止めねえぞ」

「……分かっ、て、ます」

最初のボタンが、ぷつ、と外された。

次のボタンに指がかかったとき、黒木さんは僕のベルトのバックルにも、もう片方の手を伸ばす。

——そして。

下着越しに、湿った感触に、その手が止まった。

「……お前」

顔から血の気が引いた。

駄目。それは駄目。下着を、引き下げないで、お願い——



「……っ、ま、待って、待ってください、お願い——」

遅かった。

黒木さんは、僕の下着を、ゆっくり、引き下ろした。

葉巻の煙の青い空気の中で、僕の身体の構造が、男の目に晒される。男のものじゃない、女性器のかたちをした、そこ。割れ目から薄く愛液が滲み、内股まで濡らしている。

「カントボーイか」

たった一言。

責めるでも、嘲るでもない、ただの事実確認。それが、いちばん、こわかった。

「……だ、誰にも、言わないで、ください。お願いします。お願い、します」

反射的にソファの隅まで後ずさり、シャツの裾を引き下ろし、声が震えて、目が滲んで、僕は半年前から指名してくれていた優しい「黒木さん」に、命乞いをしていた。

「客に身体売ったことは」

「ない、です、一度も」

「兄貴は知ってたな」

「……はい」

黒木さんは、しばらく何も言わなかった。表情も変えなかった。ジャケットの内ポケットから葉巻ではなく薄い紙巻きの煙草を取り出して、僕のすぐ横で火を点ける。

葉巻の甘い匂いじゃない。冷たい、紙の燃える匂い。

そこで、ぼくは、ああ、この人は本気で僕に手を出さない  
気だ、と分かって——分かって、なのに、胸の奥のいちばん  
深いところで、ちりっ♡と、何かが、ねじれた。

「お前、葉巻の匂い好きだろ」

「……えっ」

「七回目の指名のとき、俺の上着の匂いで瞳孔開いてた」

指先が、勝手に、跳ねる。

黒木さんは紙巻きを消した。葉巻に持ち替えた。コイーバ  
の先に火を点け、僕のすぐ目の前で深く吸い、ゆっくり、煙  
を吐きかける。

触らない。一切、触らない。

ただ、煙だけ。

「は……っ♡」

口から、勝手に、変な声が漏れた。

甘い。葉巻の匂いが、頭の芯まで甘い。三歳の僕が父の書  
斎の床で昼寝した記憶。母がまだ生きていた頃の、ただひと  
つ確かに「家」だった時間の匂い。それが、男の口から、僕  
の鼻先に届く。

「あ……っ、く、ろき、さん……っ」

「掟は破る。今夜だけだ」

「……え」

「お前のこと、半年前から、飼いてえと思ってた」

飼う。

優しい言葉じゃない。「好き」でも「愛してる」でもない。  
「飼う」だ。なのに——二十四年、誰にも見せられなかった  
身体が、その一言で、奥のほうから、じわ♡と熱くなった。

「……っ♡」

心臓が、痛いくらいに鳴る。

黒木さんは、もう説明しなかった。葉巻を灰皿に戻し、僕  
のシャツのボタンを、上から、ぷつ、ぷつ、ひとつずつ外す。  
最後の一つを外したとき、指先は、僕の薄い胸の真ん中で、  
止まった。

「乳首、勃ってんぞ」

「やっ、み、見ないでくださ……っ♡♡」

「俺のスーツの匂いで勃たせたな？」

「ち、ちがっ……んっ、んあっ♡」

ぴん♡と指の腹で弾かれた。

たった、それだけ。たった、それだけで、僕の腰は、勝手に  
跳ねた。

「ほら、もう一回」

「やあっ♡♡せん、せ……っ、く、黒木さ、ん……っ♡」

「黙って俺の膝に乗れ」

声に、逆らえなかった。

いや、違う。逆らわなかった。逆らわなかったのは、僕だ。  
「……黒木さんの、スーツ、絶対、汚しちゃ駄目ですよね」

黒木さんの膝の上にさせられて、スラックスの前を、僕は、自分の指で開いていた。震える指で、ジッパーを、慎重に降ろす。中から、ずるり♡♡と、信じられない大きさのものが零れ出た。

「うわ……♡」

（こ、こんなの……っ♡ こんなのが、ぼくの、中に……っ♡♡）

心の中で悲鳴をあげた。

黒木さんは黙っている。試している。氷の若頭の試験を、ぼくは今、受けている。

「ぜ、全部、舐めて、綺麗に、しますから……っ♡」

言い切って、僕は自分からそれを口に含んだ。——正確には、口じゃなかった。膝の上で自分の腰を浮かせて、自分から、奥に咥え込んだ。先端を、ぐにゅう♡と僕の入り口に押し当て、そのまま、ゆっくり、自分の体重で沈み込む。

「……っ、お前」

黒木さんの呼吸が、初めて乱れた。低い、呻きみたいな声。

ぼくは、勝った、と思った。一瞬。たぶん、一秒くらい。

その一秒の後に。

「は——ッ♡♡♡」

下から、思いきり、ずぐうん♡♡♡と突き上げられた。視界が、白く飛ぶ。

「おおおっ♡♡♡ ま、まって、まっ、いきなり、いきなり——っ♡♡」

「お前から啜えただろうが」

「だ、だってっ、こんなっ、こんな深く……っ♡♡」

「カントの一番奥、ここだろ」

「やっ♡ そこっ、ぐりぐり、しないでえ……っ♡♡」

最初のシーンに戻った。

いや、最初のシーンが、今、ようやく、始まったんだ。

ずちゅっ♡ ずちゅっ♡ ずちゅっ♡

黒木さんは座ったまま動かない。腰だけを、下から規則的に突き上げる。ベストのボタンは留まったまま、シルクのポケットチーフは濃紺のまま、ジャケットの肩の線は崩れない。崩れているのは、僕だけだ。シャツは肩から落ち、胸は剥き出し、結合部からは、ぐちゅ、ぬちゅ、と粘度の高い水音が、ひっきりなしに上がる。

「ひっ、ひぐっ♡♡ お、お汁、お汁、いっぱい……っ♡」

「お前、こんなに濡れんのか」

「やっ、いわな、いわないでえ……っ♡♡」

「もっと汚せ。お前の汁で、俺のスーツ、全部染めろ」

「ふぐっ♡♡ そ、そんな、もったい……っ♡♡」